

緩和治療部会報告

研究分担者 須田隆文（浜松医科大学 教授）

研究要旨

【背景・目的】特発性間質性肺炎をはじめとする間質性肺疾患（ILD）は、しばしば適切な治療を行っても病状は進行性であり、終末期には強い呼吸困難を呈してQOLは低下する一方で、十分な緩和ケアを提供できていない現状がある。本部会では、ILDに対する緩和ケアを確立すべく、本邦におけるILD患者に対する緩和ケアの実態やニーズ、問題点を明らかにすることを目的とした。

【方法】全国の呼吸器専門医を対象に「ILD患者の緩和ケアに関するアンケート調査」及び「特発性肺線維症（IPF）患者の呼吸困難に対するケアと終末期意思決定に関するアンケート調査」（各々3,423名）を実施した。

【結果】ILD患者の緩和ケアに関するアンケート調査では1,332名（38.9%）より回答を得た。その結果、「呼吸器専門医はILD患者の苦痛緩和や意思決定に困難さを感じている。」「呼吸困難に対するオピオイド使用の頻度は、ILD患者で肺癌患者と比較して少ない。」「ILDの緩和ケアにおいて、予後予測が困難であり呼吸困難・咳に対する緩和方法が確立していないこと、患者・家族の疾患理解が難しいことが大きな問題となっている。」ことが明らかとなった。また、ILD患者の緩和ケア普及に必要なこととして、80%以上の回答者が「呼吸困難へのオピオイドの保険適用」をあげた。

「IPF患者の呼吸困難に対するケアと終末期意思決定に関するアンケート調査」では1,226名（35.8%）より回答を得た。その結果、IPF急性増悪では、呼吸困難に対して70%程度でオピオイドが使用されるが、多くは回復の見込みがなくなってからであった。また、終末期の話し合いを急性増悪発症前に行っていた症例は約20%にとどまっていた。

【結語】呼吸器内科専門医は、ILD患者の苦痛緩和や意思決定に困難さを感じており、ILD患者の呼吸困難に対するオピオイドの使用は限定的である。

A. 研究目的

特発性間質性肺炎をはじめとする間質性肺疾患（ILD）は、しばしば適切な治療を行っても病状は進行性であり、終末期には強い呼吸困難を呈して患者のQOLは著しく低下する。一方で、ILD患者に対する緩和ケアは肺癌患者に対するそれと比較して立ち後れており、実臨床においてILD患者に十分な緩和ケアを提供できていない現状がある。2019年に静岡県下で実施したILD患者に対する緩和ケアに関する調査では、医師は、肺癌患者と比較してILD患者に対する緩和ケアの提供に困難さを実感していた。また、ILD患者では、肺癌患者と比較して終末期における緩和ケアの介入が少なく、モルヒネの使用頻度は低いことが報告されている。

そこで、これまで不十分であったILD患者に対する緩和ケアを充実させ臨床現場での普及を目指すべく、びまん性肺疾患に関する調査研究班において緩和治療部会を発足させた。本部会では、本邦におけるILD患者に対する緩和ケアの実態やニーズ、問題点を明らかにすることを喫緊の課題と位置づけた。具体的には「呼吸器内科専門医」、「ILD患者遺族」、「ILD

患者」各々を対象として、全国規模でのアンケート調査を行い、包括的にILD診療における緩和ケアの現状調査を計画した（図1）。全国規模での実態調査を進めることで、ILD患者に対する緩和ケアの抱える問題点や課題を明らかにして、それらを解決すべくさらに研究を進める。調査結果や研究成果に基づき、ILD患者に対する緩和ケアの確立に努めるとともに、広く実臨床への普及を目指したい。

B. 研究方法

本年度は、全国の日本呼吸器学会呼吸器専門医（合計約6,800名）を対象としたアンケート調査として、「ILD患者の緩和ケアに関するアンケート調査」ならびに「特発性肺線維症（IPF）患者の呼吸困難に対するケアと終末期意思決定に関するアンケート調査」の2つのアンケート調査を実施した。前者は、ILD全般における緩和ケアの現状や問題点に関して、肺癌患者・COPD患者に対する緩和ケアとの比較を含め調査する包括的な内容とした。一方、後者は、特発性肺線維症（IPF）患者の呼吸困難に

対する薬物治療（オピオイドの使用状況など）や終末期意志決定に焦点をあてた各論的な調査内容とした。アンケート調査事務局を浜松医科大学 第二内科としてアンケートを作成し、アンケート発送・回収事務局を東北大学大学院医学系研究科保健学専攻 緩和ケア看護学分野（宮下光令教授）として発送準備を行った。アンケートへの回答は無記名とした。

### C. 結果

「ILD 患者の緩和ケアに関するアンケート調査」及び「特発性肺線維症（IPF）患者の呼吸困難に対するケアと終末期意思決定に関するアンケート調査」を各々約 3,423 名の呼吸器専門医へ送付した。「ILD 患者の緩和ケアに関するアンケート調査」では 1,332 名（38.9%）より回答を得た。その結果、以下が明らかとなった。1, 呼吸器専門医は ILD 患者の苦痛緩和や意思決定に困難さを感じている（図 2）。2, 呼吸困難に対するオピオイド使用の頻度は、ILD 患者で肺癌患者と比較して少ない。3, ILD の緩和ケアにおいて、予後予測が困難であり呼吸困難・咳に対する緩和方法が確立していないこと、患者・家族の疾患理解が難しいことが大きな問題となっている。また、ILD 患者の緩和ケア普及に必要なこととして、80%以上の回答者が「呼吸困難へのオピオイドの保険適用」をあげた。

「IPF 患者の呼吸困難に対するケアと終末期意思決定に関するアンケート調査」では 1,226 名（35.8%）より回答を得た。その結果、IPF 急性増悪では、呼吸困難に対して 70%程度でオピオイドが使用されるが、多くは回復の見込みがなくなってからであった（図 3）。また、終末期の話し合いを急性増悪発症前に行なっていた症例は約 20%にとどまっていた。

### D. 考察

ILD 患者は終末期には強い呼吸困難を呈して QOL は低下する一方で、十分な緩和ケアを提供されていない現状がある。ILD 患者に対する緩和ケアを確立して広く臨床現場への普及することを目的として、びまん性肺疾患に関する調査研究班 緩和治療部会では活動を行っている。

本年度は、「呼吸器内科専門医」を対象とした全国規模での ILD 患者に対する緩和ケアに関するアンケート調査を実施した。対象は全国の日本呼吸器学会呼吸器専門医約 6,800 名であり、これまで類をみない大規模な全国調査となった。また、調査内容を総論と各論の 2 本立てにすることで、ILD 全般における緩和ケアの現状や問題点を包括的に調査すると共に、呼吸器専門医師が IPF 診療でしばしば遭遇する具体的な課題である「IPF 患者の呼吸困難に対する薬物治療や終末期意思決定」に関して調査することが可能となった。

今回実施した「呼吸器内科専門医」を対象としたアンケート調査では、呼吸器内科専門医は、ILD 患者の苦痛緩和や意思決定に困難さを感じており、ILD 患者の呼吸困難に対するオピオイドの使用は限定的である現状が明らかとなった。これらのアンケート結果に基づき、ILD 緩和ケアにおける問題点や課題を明らかにするとともに、それらを解決すべくさらなる研究を継続してゆきたい。

### E. 文献

1. Akiyama N, Fujisawa T, Morita T, Mori K, Yasui H, Hozumi H, Suzuki Y, Karayama M, Furuhashi K, Enomoto N, Nakamura Y, Inui N, Suda T. Palliative Care for Idiopathic Pulmonary Fibrosis Patients: Pulmonary Physicians' View. *J Pain Symptom Manage*. 2020 Nov;60(5):933-940.
2. Koyauchi T, Suzuki Y, Sato K, Hozumi H, Karayama M, Furuhashi K, Fujisawa T, Enomoto N, Nakamura Y, Inui N, Yokomura K, Imokawa S, Nakamura H, Morita T, Suda T. Quality of dying and death in patients with interstitial lung disease compared with lung cancer: an observational study. *Thorax*. 2020 Dec 9;thoraxjnl-2020-215917.

F. 健康危険情報：なし

G. 研究発表

1. 論文発表：なし
2. 学会発表：なし

H. 知的財産権の出願・登録状況：なし

図 1.研究のマイルストーン

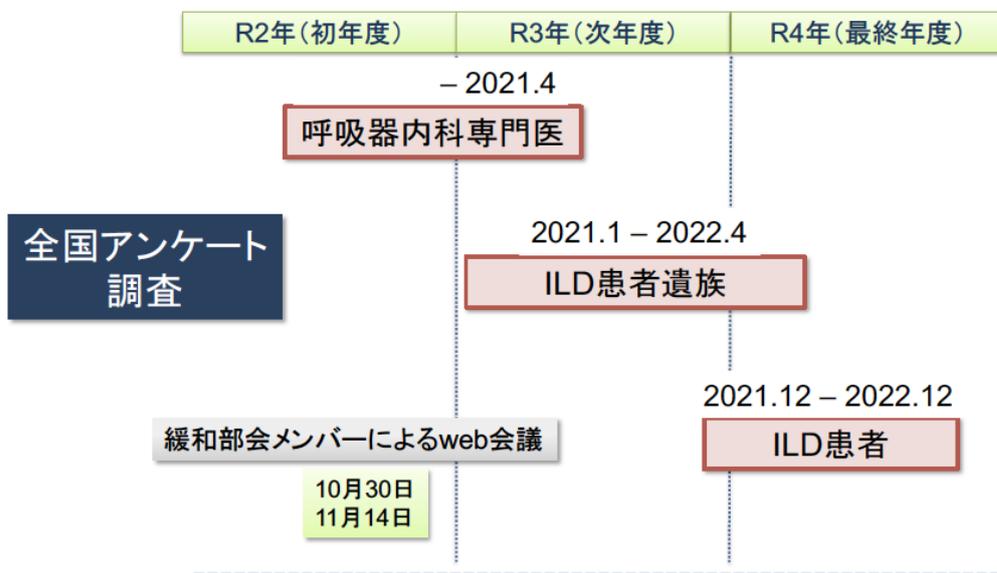


図 2. ILD・肺癌・COPD での比較 - 専門医が感じる緩和ケアの困難さ -

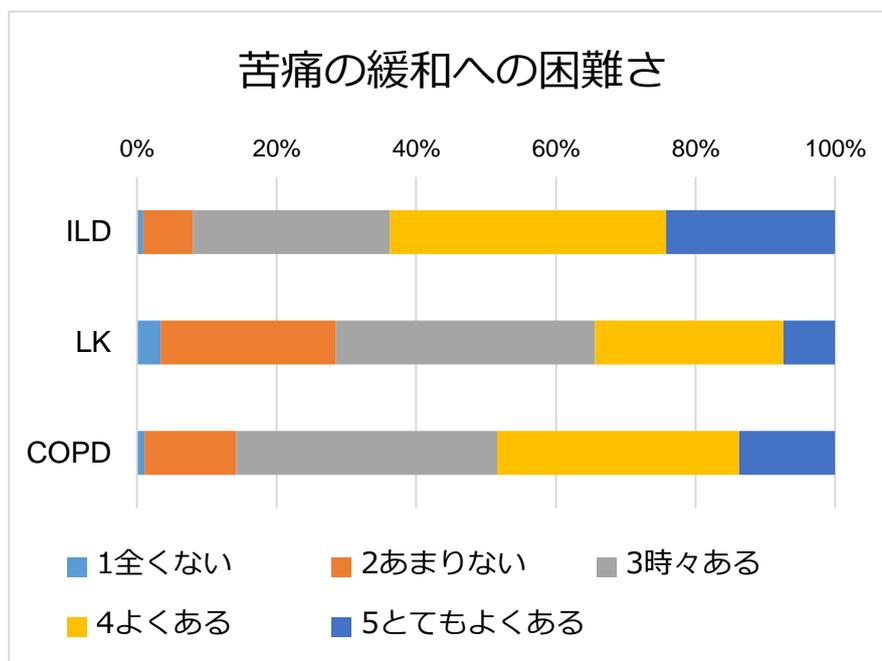


図 3. IPF 患者に対するオピオイド投与の実際

呼吸困難を有する患者がいた場合、何%の患者にオピオイドを処方するか？

急性増悪 (AE)		慢性増悪
回復する見込みをもって治療をしている時	回復することが期待できなくなった時	回復することが期待できなくなった時
<b>30% (10-60)</b>	<b><u>80% (50-100)</u></b>	<b>50% (20-80)</b>